式　辞

皆さんが在学しておられた期間に、社会を取り巻く環境には、いくつかの大きな困難が発生しました。地球温暖化に伴う災害の多発という大状況の中で、コロナウイルスの蔓延があり、そして最近ではこれらにロシア軍のウクライナ侵攻が加わりました。皆さんはこうした自然的・社会的環境の悪化にもかかわらず、本日大学の卒業という大きな成果を勝ち取られました。心からお祝い申し上げます。

皆さんと共に歩んだこの時期、大阪観光大学もやはり多くを学び、きょうという日を迎えています。理事会運営の混乱を攻勢的に乗り越え、この四月からは名実ともに学校法人大阪観光大学として新たなスタートを切ります。これに伴って、この度本学の理念・方針を定めた大学憲章を策定しました。憲章は、その冒頭で**「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」**と謳っています。観光大学であることの存在理由を、この短いフレーズに集約しています。

各種災害の多発、コロナ禍の広がりそして武力衝突といった事態の進展は、観光はもちろんのこと、私たちの生活の自由を大きく損なってきました。自由な生活の大切さというものを、失って初めて気づいた人も少なくないことでしょう。

この自由という言葉を少し掘り下げてみましょう。

私達は日々様々な目的を持って活動します。例えば、野球やサッカー等の競技では、試合で勝つことがさしあたりの目的となります。どうすれば勝つことができるかをわかっているかどうかが、そのチームにとっての自由と不自由の分かれ目となります。

このプロセスにおいて、もうひとつ大事なことがあります。試合の際の活動の対象は相手のチームですが、同時に不断に自分自身をも変革の対象としています。そういうものとして、外側から自分自身を観察し、その変化を自覚し、自分自身を変革の対象として意識しています。

設定した目的・目標は、達成される場合もあればうまくいかない場合もあります。自由あるいはその逆としての不自由という概念は、こうした実践的な問題状況とその自覚の中でこそ生じます。自分を外側から自覚できない人間以外の動物では、自由という概念が生じないわけです。したがって、自由であるかどうかは、人間的な幸福の本質に関わる概念であると言えます。

次に、二度使われている「共に」という言葉を考えてみましょう。私たち人間は、家族、パートナー、友人、同僚など、日々接する身近な人々と共に生きています。同時に、この共に生きるという関係は、直接目に見えるかどうかは別として、今や国家を超えて地球規模でのグローバルな関係にまで発展しています。衣服や食料は、世界中の人々の分業の産物です。あるいは、地球温暖化やコロナ禍は、世界中の人々を運命共同体の関係に置きます。その意味で、自由は個人の勝手としての自由ではなく、人々が手を携えてこそ実現できるものです。「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」というフレーズに登場する「**共に**」という表現はこのことを表したものです。

ちなみに、私達は「共に」生きる集団・社会の一員であることによって、そこで生まれる社会的な意識や規範を介して、他者と区別された自分自身を自覚し認識します。そこに自由・不自由という概念が生じる点で、「自由」は「共に」あることと表裏一体の関係あります。人間は多様な欲求に従って生きています。そして、一人で何かを行うのではなく、実現プロセスを、他者と共有し共感し合う中にこそ自由と大きな幸福を感じ取ることができることこそが人間の特質です。以上要するに、「自由を共に楽しむ」ということこそは、もっとも普遍的な人間的行為であり、幸福へのプロセスであることをそこで表現してい

ます。

では、フレーズの後半すなわち「社会を共に生きぬく」とはどういうことでしょうか。現実の生活は、様々な不自由に遭遇するわけで、前段の「自由を共に楽しむ」という理念通りに進むわけではありません。中でも本質的な困難は、私達が資本主義という社会システムの中で生きているという点に関わります。この社会システムのもっとも根本的な特徴は、世界中の人々との共同・協働が、競争関係を介して実現されるということです。生きていくためには働かねばならず、働く機会、とくに安定的で高度な就業機会を得ようとするほど、その獲得をめぐる激しい競争に打ち勝たなければなりません。「新自由主義」と呼ばれる特に市場競争万能の現代の世界では、こうした傾向がとくに顕著となりました。

すでにお話ししたように、社会的分業の発展としてみんなで支え合う関係にあることは確かであり、その限りではここでも「共に」という言葉がキーワードとなります。しかし、それは同時に市場における弱肉強食の競争の世界を通じて実現されます。したがって、フレーズの後半部分では、「自由を楽しむ」ことに代わって、現実の社会システムにおいて競争関係の中を「生きぬく」ことが前面に登場することになります。

言い換えれば、この「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」というフレーズは、前段が人間の生命活動における普遍的な原理・本質を、後段はとくに現代社会システム特有のそれを表現したものなのです。

興味深いことは、この両面が、現代社会ではしばしば時間的・空間的に分離した形で現れることです。順序をひっくり返して言えば、労働と労働以外の活動・余暇活動との関係として分離されることです。この後者、余暇活動のうち非日常空間への移動を伴って行われる自由な活動が、観光にほかなりません。したがって、一般的には、観光を実践することは、もっとも自由な人間的活動であり、人生の幸福と楽しみに繋がる活動ということができます。

このように、私達の生活は、この市民として自由を「楽しむ」領域と職業人として「生きぬく」ことの二つの領域からなっています。両者は切っても切れない関係にあるわけですが、両者の違いを認識した上で、「楽しむ」力を鍛えこれを「生きぬく」領域にも広げていくこと―今回の憲章はこうした理念・展望を表したものです。

したがって、憲章は本学の教育理念を示したものであると共に、所定の課程を終えられた卒業生の皆さんの、これからの人生のあり方に関する本学からのメッセージでもあります。宮沢賢治はかつて次のように述べました。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(『農民芸術概論綱要』)。この不確実で軋轢に満ちた時代にあって、人間的自由を断固として守り抜く姿勢を貫くとともに、共感に充ちた人生を世界中の人々との連帯の中で歩んでいただくことを願って、学長式辞といたします。

二〇二二年三月一八日

山田良治